

自然観察NOW

野幌森林公園自然情報

2008.6.15 No.3

北海道ボランティア・レンジャー協議会

開葉の違い

ほとんどの木々の葉が開き、緑が色濃くなってきました。4月の芽出しの頃より、木々の葉の開き方を観察していると、開葉が早かったり遅かったり、一斉に葉が開いたり、順次葉が開いたり、樹種によってさまざまです。しかし、葉の出方には幾つかの法則性があるようです。

樹木はその種類によって、葉の開き方（開葉パターン）は大きく3つに分けられます。

1. 一斉開葉型

春先に芽が開くと同時にその1年のほとんどすべての葉を開ききってしまいます。例えば、ミズナラはわずか2週間足らずですべての葉を開いてその年の体制を完成させます。

2. 順次開葉型

長期にわたって1枚ずつ葉を開いていきます。これは早春に第一葉を開いてから夏の終わりごろまでに次々と葉を展開させながら枝を伸ばしてていきます。

3. 一斉プラス順次開葉型

第一葉は一斉に開き、それ以降は順次葉を開きながら枝を伸ばしていきます。

開葉パターンの違いには、葉を展開するスピードの違いもあります。例えば、シウリザクラやイタヤカエデは比較的早く葉を広げますが、ホオノキやヤチダモ、イヌエンジュなどは遅い傾向があります。開葉の早い木と遅い木が葉を広げ終わるまでに2か月間ほどの違いがあり、その間森の中は日の光りの注ぎかたはまだら状態になっています。そして、すべての葉が開き終わるころは、森の中の光量は森の外側の約10%ほどになってしまうそうです。

このように、葉の開き方の違いは、各々の木の生存競争に対する戦略の違いと密接な関係があると言われます。葉を開くとその葉を餌とする動物や昆虫などに狙われやすく、特に柔らかい若葉は格好の餌食になるので、いかにそのリスクを減らすかの作戦を考え、葉を開いていきます。

このように葉が開く仕組みには、生きるための工夫が隠されているのです。

(参考 バーダー 2007 4月号)

観察会の予定

・初夏の森観察会

7月6日(日) 10:00~12:30 集合場所 野幌森林公園大沢口 ふれあい交流館
バイケイソウや何種類かのアザミの種類の花が咲いています。また、森の奥から聞こえるキジバト、ツツドリ、ウグイス等の鳴き声を楽しみましょう。

・芸術の森周辺観察会

7月20日(日) 10:00~12:00 集合場所 芸術の森停留所前
真駒内川や芸術の森周辺の探索をしましょう。日頃見落としがちな野草を発見したり、見慣れている野草をじっくり観察すると新しい発見があるものです。

ミズキ

ミズキの花が咲いています。木の下から見上げる、葉に邪魔され見えにくくなりますが、枝先に注目しましょう。小さな花が密生していて枝先が白くみえます。このような花の付きかたを複散形花序といいます。枝は幹に放射状にでて、水平に広がります。これは、主軸の成長が止まると腋芽が成長して主軸がつき足されるようになりリレー式に伸びていきます。このような枝の伸び方を「仮軸成長」といい仮軸成長による枝分かれを「仮軸分枝」といいます。

ミズキの材質は白く緻密なことから細工物の材料となります。また、昔アイヌの人たちにとっては神聖な木でもあり、天国では「キハダは金に、ミズキは銀に、ハンノキは銅になる」といって伝えられ、儀礼に欠かすことができない祭具の一つであるイナウ（御幣）の材料としました。

ミズキの語源は、地中から多量の水を吸い上げるから水木といたり、春の芽だしの時期に幹や枝を切ってみると水がたくさんにじみでるからだとも言われています。

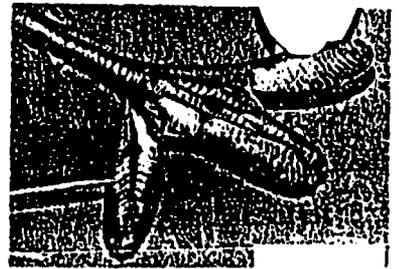
カイツブリ

野幌森林公園内の瑞穂の池へ行くと、水面に水鳥の姿をみかけることがあります。よく見るとその中にカイツブリの姿があります。流れのある場所よりも流れのない池、沼、河川を好みます。

雌雄同色で、尾は極端に短く、ややずんぐりした丸い体に長めの頸と小さな頭の姿です。

夏羽は頬から頸がレンガ色で嘴の基部に黄白色斑があるのが特徴です。

カイツブリのほかの特徴は足にあります。カイツブリ類の足は「弁足」とよばれ、左右に偏平な形で、指の一つ一つには木の葉のようなヒレが付いています。非常に柔軟でさまざまな方向に動かすことができるため遊泳や潜りに適していますが反面、足が体の最後部についているため歩くことが大の苦手です。



繁殖期には雌雄共同で水草や茎を巣材にして巣をつくりますが水面に浮いているように見えることから「浮き巣」と呼ばれていますが、水位変動で巣が水没することもあり、幾つかの代替巣をつくります。

カイツブリの語源はカキツムグリツ（掻いたり潜ったり）の略とか、カイは関西方面の「たちまち」の意味で、ツブリは水に潜る音からきているとか色々な説があります。漢字名は「鳩」と書き、水に潜るとの意味があります。

外来生物被害予防3原則

人間は多くの生き物を利用して生活しています。しかし、生き物をあらゆるところに持ち込んだり、野外に放ったり、逃げ出したりすることによって在来の自然環境や野生生物に深刻な悪影響を及ぼし、外来生物被害がでています。2005年、外来生物法が制定され、特に、特定外来生物に指定されている生物については厳しく規制されていて、野幌森林公園では、アライグマ、オオハンゴウソウ、セイヨウオオマルハナバチが対象でしょう。

1. 「いれない」 悪影響を及ぼすかもしれない外来生物を日本に入れない。
2. 「捨てない」 飼っている外来生物を野外に絶対に捨てない。
3. 「拡げない」 野外で既に繁殖している外来生物を他地域に拡げない。